



サムライガール ～愛しさと切なさと

みかづき紅月

illustration ©YUKIRIN

美少女文庫
FRANCE & SHOIN

プロローグ

心に秘めた想い

死出の旅路――

それは、サムライが誇りを胸にたった一人で歩むべき花道。
いずれ道が現われれば、私も一人で逝くだろう。

私は殿と誓った。一緒に戦うと。

たとえ、その約束を反故にすることになろうとも。

死出の旅路を譲ることだけは決してできない。

それがサムライとしての私の生き様なのだから。

「――風が……」

長いポニーテールが宙に流される。

誰もいない校庭の真んなかで、私はただ一人、背中から前へと流れてきた艶やかな髪をかきあげ、真夏の夜空を見あげた。

煌々と輝く月をとらえる双眸はオッドアイ。

片目は、普通の黒色だが、もう片目は夜空を思わせる紺碧の色をしている。

そんな私の色違いの瞳に、血のように赤く染まった大きな満月が映る。

「赤い月。不吉な……」

胸のなかに滲みだす不安を唇から吐きだす。

私は、息苦しさを覚え、不意に胸を押さえた。

疾風が私のすぐ傍をよぎる。

スカートの舞い、砂煙があたり、足もとをけぶらせ闇に溶けてゆく。

夜空の低い位置で不気味に揺らぐ月が、不穏な出来事の前触れのように思えてならない。

「――なにも起こらねばよいのだが」

嘆息すると、左手に握りしめた刀を見やる。

私のまなざしに応えるかのように、刀が鞘さやごと淡く輝く。

血色に滲んだ月と正反対ともいえる淡い藍色の光――

その光を目にすると、ざわついた心が静まってくる。

しかし、胸にこびりついた得体の知れない不安は、どうしても拭ぬぐい去れない。

「いや、なにも起こらずにすむとは、到底思えぬ」

気のせいだと思いたい。

だが、この胸に巢食う不安感の気のせいじゃないと、私の身体に流れるサムライの血が鋭い警告を発している。

私の名は久遠刹那くおんせつな。現代に生きるサムライ。

銘刀、月のなかで、唯一刃を持たない特殊な刀、蒼月そうげつの継承者である。

銘刀、月とは、主のために打たれた刀。

仕えるべき主を見つけ、心身ともに強い絆で結ばれることによって、本来の力を発揮する宝刀である。

ちなみに、私が持つ蒼月は先の戦いで折れてしまい、鞘の返角あたりまでしか長さがない。

一見、刀として機能するとはとても思えない刀である。

だが、私は、剣気を刃の形にし、普通の刀と遜色そんしよくのない力、いやそれ以上の力を発

揮することができる。

そう、今ならわかる。この形こそが蒼月の在るべき姿だと。

いまだもってその理由は不明なままであるが――

私と同じく現代のサムライとして銘刀、暁月を継ぐ者、銀城谷舞羅の言葉を思い起こす。

人間国宝でもある名刀匠、銀城谷吉光かなしろや よしみつを父に持つ彼女は、昨晚、ここに私を呼びだして忠告した。

「起ることはすべからく意味がありますの。蒼月がそのような特殊な形となったことにもきつと意味がありますわ。その意味を探すのが、蒼月の継承者であるあなたの役目だということを忘れないで……」

私は彼女に重々しくうなずいてみせた。

すると、彼女はつらそうに眉根をひそめ、吐息といき混じりに呟いた。

「そして、これから起ることすべてにも意味がある……」

「舞羅？ どうしたのだ？ なにかよからぬことが起るというのか？」

私の問いに、彼女は浮かぬ面持ちのまま答えた。

「……名だたる剣を持つ者たちの間で、『紅き死神』と呼ばれ、恐れられている剣士がいることをご存知？」

「――紅き死神」

思わず息を呑む。

それは、名剣や銘刀の継承者たちの間で、口にするのも忌まわしいとされている劍士の異名。

死神の鎌を思わせる太刀を一振りしただけで、必ず誰か一人の魂を獲るほどの力を持つと言ひ伝えられ、恐れられていると以前お祖父様に聞いた覚えがある。

だが、その話は、ずいぶんと昔のこと――

てつきり、おとぎ話や都市伝説の一種としか思っていなかったのだが……。

「さすがに、知っているようですわね」

「ああ……。だが、いったい、それがどうしたと言うのだ？　てつきり架空の人物だと思つていたが……」

いやな予感を覚え、私は舞羅の次なる言葉に懸念する。

と、彼女は首を左右に振った。その首の動きに合わせてツインテールがふるふると揺れ、やわらかな金髪が月明かりを反射して煌く。

「紅き死神の伝説は、確かに多くございますわ。ですが、紅き死神は伝説上の人物ではありませんの。まぎれもなく実在する人物。そして、ここ近年、ヨーロッパを舞台に名剣を力ずくで片っ端から奪いつくしている」

「名剣を、力づくで——」

「ええ。死神は圧倒的な強さを持ち、名剣の持ち主を徹底的に傷つけ虫の息にして、剣を奪ってゆきますの。以前から、銀城谷家はその動きに注意を払っていましたわ。

正統な後継者から剣を奪うなんて、剣を愚弄する行為、許せませんもの」

舞羅は、語気を荒げるとその小さな拳を握りしめた。

「——死を与えないのか。あまりにも残酷な」

「そう、ですわね。恐らく、その残酷な行為を楽しんでいるのでしょう。死神より悪趣味ですわね……」

「で、その死神が？」

「どうやら、舞台を日本に移したらいいですわ」

「なにっ!？」

彼女の言葉の意味するところを知り、私は戦慄を覚えた。

紅き死神が日本へとやって来た。ということとは——

「銘刀、月を狙ってくる、か——」

「ええ。まあ、もっとも、他にも銘刀はいろいろありますから、すぐに月を奪いに来るかどうかまではわかりませんわ。だけど、必ず紅き死神はわたくしたちの元へとやってくる……」